

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和元(2019)年  
7月号

通巻587号  
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和元年7月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷<sup>監</sup>  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



チョウトンボ (和歌山市 四季の郷公園にて)

和歌山県岩出市 森脇聖淳さん撮影 (文・8頁)

昭和40(1965)年7月23日 月次祭法話より

## 自然の流れに沿って生きる

法主 矢追日聖 (満53歳)

### 大倭教出発から二十年

今年は大倭教が出発してから満二十年になります。今度の『大倭新聞』(昭和40年7月23日発行)は二十年間の歩みについて特集をやるということで、いろんな角度から書いてほしいです。

私は物忘れのほうでは大倭の中でピカイチですから、済んだことはものすごく忘れるんです。『大倭新聞』の編集に対して、正確な答えは出来ないと思うんですけれども、二十年間の流れというものだけはよく掴んでいます。

大倭教は終戦と同時に出発です。その出発当時に、二十年後になると動き出してくると霊示があったんです。私が数え歳で三十五歳でしたから、二十年後というと五十五歳になる。けれども、二十年後のことがどうなるこうなると言われたってねえ。みなさん方も経験があると思うんですが、三十五歳ぐらいの時に、二十年後が本当の大倭の仕事で軌道にのっていくんやというようなことを言われればがっかりするんですよ。

やっぱり私も人間としての考えを持っておりますから、これ、どないなるんやと思っちゃったんです。けれども、今日は今日の風が吹くし明日は明日の風が吹くというふうな気持ちで、ずっと今日までできて振り返って見れば、この二十年は実に早かったと思います。

三十五歳の時に考えた五十五歳と、その歳になった今の自分の気持ちというよ

うなもの、すぐくひらきがあるんですね。二十年先まで仕事をやっていくんであれば、達者でいけるんやろかというような、人間としての勝手な考え方がありました。私は百姓して育ったんじゃなく、中年から百姓をしたからものすごく肉体に堪えたんですよ。けれども生一本で、これも神意だと思ってやり抜いたんです。まあおかげさんでこの二十年間というものは無病息災で、一日として病気で寝たこともありませんし、また医者者の世話になったこともないんで、その点恵まれていると喜んでいっています。

## 忘れやすい欠点を自覚

神さんに対してえらいすまんことですけれども、過去のいろいろな霊示を実は忘れておったんです。二十年経ってみて今初めて、思い出ししているところです。

こうしてみなさん方と接していれば、私の人間なりの性格もよく分かると思うんですが、案外濟んだこと、過去のことは忘れやすいんです。忘れやすいがために自分で記録していくという癖もよくあります。

ここ最近といっても十年程ですけれども、当日日記をつけています。一日として飛ばしたことがない、全部書いてある。夜中の二時になろうが三時になろうが、寝る前に必ずその日の日記は書いていっているんです。字に書いておけば読めますからね。忘れるという自分の一番の欠点を、日記をつけるということによって補っております。

その日その日を書くということは、自分の歴史を創っていくということにもなるんだし、過去を振り返る時に一番分かるんですね。一つの道楽かも知れませんが、ものすごく物事を忘れる

という欠点を、自覚しているから書くという癖があるんです。

## 無計画の中に計画がある

今日までの二十年間の動きの中で、一番みなさん方に言いたいことは、統制のないところに統制があるとか、無秩序の秩序とか、無計画の中に計画があるということです。

こんなややこしい言い方をすると、普通の人はおそらく分からないと思うんですけども、その計画というものは、霊界から操り人形のように動かされているのであって、人間が自分の頭で物事を考え計画して、自分が実行していくというんじゃないんです。

例えば今日のお祭りの場合でも、ああ二十三日で大倭の月次祭だから、お参りしようという心が先に働いて、後から肉体をつれてくる。人間個人の場合でもそのように心のほうが先に働いて、時間が経ってから肉体がついていくというのが物の順序だと思えます。家一つ建てるにしても、先ず頭の中で計画をして青写真を引いて、それから業者が手を付けて形を造り上げていくというように、もう全てが心のほうが先なんです。

それをもう一つ大きく考えて、霊界が心であって、現界が我々の肉体だと仮定した場合でも、理屈は一緒だと思えます。霊界のほうが先に動いてあって、現界のほうがそれについていくというような形を踏んでいる。それがために、私は無計画の中に計画があるというような言葉を使うんです。

結局、引きずりまわしていく自然の動きというものがあるんですね。これは四季の変化というもので例えればはっきり分かるんですけども、それ

以外のところでも霊界としての動き方があり、その霊界の動きというのは、また現界の実状を見て動くんです。

『大倭新聞』にも書いておいたように、現界にある事実というものが一つの原因となって、霊界にもそれに対しての何かの動きがある。霊界の動きが今度はまた、現界に及ぼしてくる。肉体と心というような形で、くるくる回っているんです。大倭のこの二十年間の過去を振り返った時、そういうように霊界のほうで全ての動きを計画してくれています。それに対して我々は意識しておっても意識しておらなくても、引っ張っていかれるんです。霊界の動きに我々が無条件でついていかされておるんですね。

自然に流れるようなそういう動きの中に、自分の持って来た一つの宿命というものの、運命的なものがあると私は信じています。結局、私の信仰する対象というものは霊界の動きなんです。

## 神ながらの「道」と「法」

生活の中で、朝起きて糞したくなってきたら、もう自然に便所へ走って行きますね。これが流れに逆らわない、いわゆる神ながらの「道」といういき方なんです。肉体に直接感じている問題は、素直に順応しているんですね。だから神ながらの道というのは、創られるんじゃないに自然発生であって、だいたい人間を中心としての教えなんです。

それに対して、宇宙の出来た時から流れている、絶対犯すことの出来ない流れというものがあります。これが神ながらの「法」のほうです。私は出来るだけこの神ながらの法というものを実践したいと思っているし、今日までしてきたつもりです。

それで現在、一応、大倭教という宗教の形においては神ながらの法と、『大倭新聞』にでも私は「法」という言葉をよく使っています。しかし、これは人間がこの世の中に生まれてくる以前、まだ月や太陽とか地球とかそんな物もこの宇宙の中にはつきり出来ていない、深い昔からある一つの法則なんです。

その宇宙の神ながらのいろんな仕組みから、人類というものが地球の上に湧いて来たんです。そして地球上に集団で生存して社会生活をしておりま。神ながらの法に逆らっては人間と人間の生活がうまくいかないから、幸せにはなれませぬ。

そこで、昔からある宇宙の神ながらの大法を悟って、まずその味を掴んでもらって、自分達の生活の中に生かしていく。それを我々の人間社会に実践遂行していくところに、神ながらの道というものがあるわけなんです。

## 太加天腹大神とは

人間を対象に言いますと神ながらの道ということになるんですが、私のように霊界と現界にまたがっている立場の人間であれば、神ながらの法に重点を置くようになってくるんです。

日本の我々から見た神ながらの大法というものを、仏教の釈尊もお説きになられているんですよ。

「我仏を得てより来経たる所の諸の劫数無量百千萬億載阿僧祇なり」と、『法華経』寿量品の自我偈の最初に書いてあります。

まあ一劫ということ自体、ものすごい年代の長さを持っているんです。その劫数が「百千万億載阿僧祇」だということですから、測ることも出来ない「無量」の長さであるということです。そのように釈尊の場合においても宇宙の根源にさかのぼっ

ているんです。仏教じゃなくて「法」のほうですね。仏法は「無始無終」、始め無し、終わり無しで、計り知ることが出来ないところえています。

日本の『古事記』なんかだと、宇宙創生の時、天之御中主大神などの造化三神がこの世の中に出て来たんですけれども、隠れ身であって姿がなく、ひとり成りませぬ神であると説明しているんですね。だれか神さんがおつて、そんなものをこしらえたんじゃないし自然に発生してきたというんです。その自然発生した力、エネルギーに天之御中主大神とかいう人格神の名前をつけているんです。その宇宙創生までさかのぼる根本のエネルギーを、大倭では太加天腹大神と言っておるんですが、釈尊が仏法と言う場合も同じことなんです。

## 「言向けの矢」を放つ

仏教という教義をつくって教団になっております。大倭の場合でも一つの宗教団体というように見えますけれども、私の中においては別にそんな気持ちはないんです。またこんなものどうなってもかまわない。しかし矢追日聖という現界の人間を通じて出てくる神ながらの法というものがあります。それに対して来る人がおれば、その人達が集まって大倭の宗教団体のように見えるんですけど、別に教団みたいな形はなくなつてかまわないんです。

ここ最近、いわゆるジャーナリストがよくみえます。新聞記者とか、あるいは雑誌を編集する人が取材に来るんです。これは二十年前からもうすでに霊界から言われてたんですが、その通りになってきました。まあ昭和四十年ということは今言わんと、二十年の後と言われたんやけど、ほぼ今年ぐらいからですね。そして、そんな時に、「言向

けの矢」を放てとおっしゃったんです。

だから今はおかげさんで若い人が沢山おつてくれますし、『大倭新聞』（昭和39年8月31日に第1号発行）を出すことになって、「言向けの矢」を放っているんです。その新聞に矢追日聖というような大化けもんがいろんなことを書いて載せておけば、世間ではやっぱりそんなキチガイとか化けもんが沢山おりますから、その中には分かっている人もいると思うんです。

相手の人が信じてても信じなくてもかまわない。自分の持つて来た宿命というものを、また自分がいろいろ霊界から受け取った感覚というものを、正直に文字に表して世間の前にさらけ出す。それがいわゆる善であろうと悪であろうと、どちらの意味にしても「言向けの矢」を放したことになる。

矢追日聖の書いていることは、なるほど結構なことやという人もまあそれでよろしいし、あるいは大倭のキチガイ、古ダヌキというような人がおつたとしても、相手が矢追日聖を知ってくるといふことになるんだしね。善とか悪とか超越した世界において、大倭は「言向けの矢」の上に乗って走っているというわけですね。

## 時機が一番大事

いつも同じようなことをしゃべるんですが、この時機というものが一番大事であつて、その時さえ訪れてくれれば物事は達成していくということなんです。そこにおいて必要とするいろいろな物は、我々の方から求めなくても向こうの方から出てくる。求めずとも与えられるということとは、いつも霊界が言うことなんです。その中で時というところが一番重点的に考えられているんです。

普通の利口な人はこんなことが信じられないの



が本当なんです。私はそれが腹の底に染み渡って信じられる人間なんです。自分のお役目もそれによって果たしていきけるんだというのを信じられた場合、このくらい気楽なありがたいことはいんです。

別に金のない時は金のないような絵を描いたらいいんだし、また金があれば金のあるような絵を描いたらいい。なにもがむしゃらに人の物を盗んでまで金持ちになろうという根性も出ないしね。

結局死んだ時には、巨万の富があったとしても、どんなに立派な家があっても、何も持っていくことは出来ない。自分の周囲取り巻きに立派な人が沢山あったとしても、死んでいく日になれば孤独にたった一人で死んでいく。これはもう時間の問題で決まりきっているんです。それさえ分かればね、世の中というのは案外気楽なんです。

## 欲のない暮らしをする

この霊界というものが分かれば、普通の人が持つような苦痛というものは持たないですむと思えます。

物欲と言いますか、物に対しての欲望というものはなくなってくる。けれども着る物もなけりやいかん、食う物もなけりやいかん、やっぱり住まいもなきやいかん。これは生かされているんですから、その人なりに合ったものが生まれて来るわけなんです。

例えば同じ鳥一つ見ても、スズメの巣はどこにいてもおおざっぱな藁の屑を集めたような巣です。ウグイスは茶碗のような綺麗な巣を作ります。また夕力は、枯れた枝を集めたおおざっぱなものです。シジュウカラは巣の中に自分の毛を抜いて巻き、外は草の細い根をきちんと卵形に包んで、

一番外には古い松とか檜なんかの上にある固い苔を張り付けて、そもそも実に芸術的な巣を作ります。そういうように鳥一つでも、その鳥に応じたような巣を作ります。

人間も同じことで、その人なりにやっぱり備わっているものがあります。着る物や食う物、あるいは家にしても、自分に合うたことさえしとつたらそれでいい。それ以上求める必要はないんです。私が先ほど言った神ながらの道の信仰心というのは、そういうようなことです。人間が考えなくて霊界の方で計画して動かして来るんです。

それに対して素直な気持ちで、流れに沿う自分さえ作ってあげば、自分なりに持つて来た一つの宿命的なもの、あるいはまたこの世の中でしなればならないことは、自分の意識がなくなつて分かつて来るんです。

## 神ながらに生きる

大倭も今日まで二十年間来たんですけれど、やっぱり昭和の四十年になってまいりますと、何か知らんけども新しい若さというものが出来たように思うんです。それからまた求めなくても、大倭を外から真面目な意味でPRするような人も段々と増えて来るような気配なんです。

こういうようなことは、私が計画しているんじゃない。求めんでもここにはつきりと神意というものが出て来ると私は思うんです。

そういうような動きを、私は絶対とし信賴して今日まで来ているんです。それだけにこの自分の人間の生活の中において、例えば貧乏しようが、あるいは家が火事で燃えてしまおうが、あるいは自分の親兄弟や一門の者がみんな病気で死んでしまおうがね、どんなことがおこつても、私自身は何

にも苦にはならないんです。

病氣なら治るように努めて、死んだら葬儀したらしましやし。手でも落ともしよつたら、はよ治るようにさえ手当してやったらいいんやしね。それに対して「気の毒に」みたいな同情はいらん。

全てはその人なりに持つているものがあるんです。という冷淡に聞こえますけれどもね、これが本当の慈悲なんです。私のものの見方というのは実に冷淡かもしれないですけども、その人が持つているものなんだから私は救うことが出来ないんです。

お互いに自分の宿命というものを信じあつて、みんなが気持ち合せて、一つの流れに沿っていくというのが、私は神ながらのいき方だと思えます。だからあんまり人のことを自分の認識でかまう必要もなけりや、人のことで腹立てることもいらん。みんながその人なりに生まれつきの持つたものがあるんやから、それをお互い正直に、伸ばしやすような雰囲気にして、神ながらの流れに沿っていく。それをお互い努めていくというのが大倭の宗教だと思えます。(文責・編集部)

## こぼれずみ

杉本順一

昔、紫陽花邑の西隣は小高い山々だった。宅地開発で自然がどんどん壊されていった様子を私も覚えていた。今は藤ノ木台と呼ばれる地区だ。

地元では東山の天狗さんがいると言われている。天狗さんは削られた天王山に棲んでいたと法主さんにお聞きした。私自身、大変なお怒りの言葉を聞いたことも……。法主さんは天狗さんを天香山の面影の残る場所と呼んであげて、東山坊大善神と名をつけ、当時出来たばかりの「大倭プロック製作所」(昭和40年6月23日、後に昭和61年7月14日から大倭病院)の守護神とされた。

こもれる魂魄の地を訪ねて (第48回)

# 菅原道真

兼田 隆

♪通りゃんせ、通りゃんせ、ここはどここの細道じゃ、天神さまの細道じゃ……。童謡「通りゃんせ」の中の「天神さま」、お年寄りに天神さまは誰の事?と質問するとほとんどの方が、「学問の神様」とか「菅原道真」や」と答えてくださいます。出生地は奈良市とも京都市とも伝わりますが、京都には祖父や母の墓と伝わるものが存在しますので、京都の方が有力だと思われまます。道真は学

じんずうりきによせ

## 「神通力如是」の真意をさぐる

### 第二回

#### 大倭教の源流にさかのぼって

前回は「神通力如是」の前文ともいえる法主様による解説の文を紹介しました。今回からは、いよいよ神語りの本文に入っていきます。法主様が神語りの内容と状況を忠実かつ克明に記録していることとされている強い思いが伝わってきます。

法主様が当時住まわっていた鳥見庄山の実家の座敷において、法主様の目の前で奥様の矢追妙月(輪孺香)さんが神楽を舞い、神語りを行う姿を想像しながら読んでみて下さい。

今回は神語りを始めるための導入のような場面です。文章としては非常に短いのですが、神語りに入っていくためには長時間の心身の準備が必要であることが、この記録の文面から窺われます。

なお、原文では説明の文もカタカナ書きですが、読みやすくするためひらがな書きにしました。三人の会 (岸田哲、杉本順一、林修三)

問の家系である菅家に生まれ、右大臣にまで昇りつめますが、時の権力者である藤原氏の怨みをかき、大宰府に左遷させられ、59歳で非業の最後を迎えます。

都では道真の死後、左遷人事に関連した人物達の死と水害や疫病の発生、それに清涼殿に落雷があった事など、この恐ろしいものの正体を雷神、または天神と呼びました。雷とは「神鳴り」の意味でもあると言われており、菅原道真イコール天神という図式が出来上がりました。

朝廷はこれらの一連の出来事を鎮める為に北野天満宮や太宰府天満宮(写真)を創建、現在では1万社以上の天満宮が存在すると言われており、道真は天満大自在天神として祀られ、火雷神とも

呼ばれる様になりました。こうして百年以上崇った道真の怨念は影を潜め、以後天神イコール学問の神様として人々が崇拜するようになりました。

道真が、都を離れる時に読んだ歌をご紹介します。「東風吹かば 匂いおこせよ梅の花 主なしとて 春な忘れそ」(春の東風が吹いてきたなら花を咲かせて匂いを届けておくれ、梅の花よ、私(道真)がいなくても春を忘れないでおくれ)



### 原文

昭和十六年十一月六日 於 鳥見庄山 朝  
神楽、鈴さばきが一時間余り続く。  
① 昭 和 十 六 年 十 一 月 六 日 於 鳥 見 庄 山 朝  
神 楽、 鈴 さ ば き が 一 時 間 余 り 続 く。  
② 手 神 楽  
③ 日 聖、 倭 姫 の 来 る 靈 感 あり、 歡 喜 の 涙 ば  
と ぼ と と 落 つ 。

正午の祭拝の時も朝と同じ。  
夜、三時間余りに亘って神楽を奏す。  
④ 六 回 目 に 及 ん だ 時、  
⑤ 「 ナ ム、 ミ ヤ ウ、 ホ ー レ ン ゲ キ ヤ ウ ー、  
ナ ム、 ミ ヤ ウ、 ホ ー レ ン ゲ キ ヤ ウ ー、 ナ  
ム、 ミ ヤ ウ、 ホ ー レ ン ゲ キ ヤ ウ ー、 ア ナ ー  
ウ レ シ イ ー ア ナ ー ウ レ シ ヤ ー ノ ー、 ナ ム、

正午の祭拝の時も朝と同じ。  
夜、三時間余りに亘って神楽を奏す。  
④ 六 回 目 に 及 ん だ 時、  
⑤ 「 ナ ム、 ミ ヤ ウ、 ホ ー レ ン ゲ キ ヤ ウ ー、  
ナ ム、 ミ ヤ ウ、 ホ ー レ ン ゲ キ ヤ ウ ー、 ナ  
ム、 ミ ヤ ウ、 ホ ー レ ン ゲ キ ヤ ウ ー、 ア ナ ー  
ウ レ シ イ ー ア ナ ー ウ レ シ ヤ ー ノ ー、 ナ ム、

### 註 釈

① 神楽 鈴さばき

・ 神楽……民間の神社の祭儀で奏する歌舞のこと、  
勸楽、観楽、よろこびたのしむこと。一説に、かんらくの転じてかみくら、かんくら、かぐらとなった。

・ 鈴……は音の涼しさより名づくとも。  
・ さばき……手にとって巧みに扱うの意。  
また、一説には神楽というのは神が在ます場所という意味の「神座」が変化した言葉で、一般的には神社等で神をまつるために奏する歌舞のことをいうとも。鈴は狂言の神楽や里神楽などで巫女が舞う時に使われる。

ミヤウ、ホーレンゲキヤウ……」(⑦原文には発声のための記号がある)

ケ	ヤ	ウ	ミ	ヤ	ウ	ホ	レ	ン	ゲ	キ	ヤ	ウ	ナ	ム	ミ
ク	シ	イ	ハ	カ	ラ	レ	シ	ヤ	ウ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
キ	ヤ	ウ	ミ	ヤ	ウ	ホ	レ	ン	ゲ	キ	ヤ	ウ	ナ	ム	ミ

『広辞苑』『平凡社大辞典』などによるこの「神通力如是」では、神語りへの導入に際して毎回のようにゆっくりと時間をかけて神樂が舞われていることに注目したい。特にこの初回の場面では非常に長く行われている。このことは神通力を許された輪舞香がその巫女としての体質を高めていくために必要な道筋であったといえる。

② 手神樂 ひざまづいて、手のみで舞う神樂。

③ 日聖、倭姫の来る靈感あり、歓喜の涙ほとほとと落つ。法主が妙月に倭姫の霊が憑依するのを感じた時、法主と顕幽不二の状態になった倭姫の喜びの心境が法主を通じて形で示されたものの。

④ 倭姫 記紀には第11代垂仁天皇の皇女とするされている。この天皇の御世には前代の崇神天皇の命により皇居から出た「天照大神」の祠を豊鍬入姫命が倭の笠縫邑で祭っていたとある。(なぜ「天照大神」が皇居を出たかについては、岩波書店『日本書紀・上』を参照されたい)垂仁25年3月倭姫は天皇の命をうけて、まず笠縫をはなれ菟田菟幡にいたるとあり、このあと近江、美濃、などをめぐり最後に伊勢国の五十鈴川上に遷したとある。

垂仁天皇の皇女であったが「神通力如是」の中では、11月7日の記述に「われこそは崇神むすめ、やーまーとーひーめー」とある。「神通力如是」における倭姫は、全体の狂言回しのような重要な役目を演じている。

⑤ ナム、ミヤウ、ホーレンゲキヤウー この言霊を南無妙法蓮華經と書きあらわされるのは誰しもが知るところである。この七文字の漢字は、日蓮宗三大秘法の一つ。妙法蓮華經に帰依する意。これを唱えれば、真理に帰依して成仏するという。(『広辞苑』)

『やわらぎの黙示 一大事の因縁』101頁「日蓮との出会い」の中に、「私(法主)は日蓮とどんな宿習があったのかわからないが霊的交流をもったのは十六・七歳頃と記憶している。勿論それには私が生れた家庭環境にも大きな起因が潜在していたことは否めない事実である」とある。

「神通力如是」ではこの「ナム、ミヤウ、ホーレンゲキヤウ」の言霊がくり返しあらわれてくるが、この書は昭和15年11月、12月に記されたものであり、当然ながら大倭教の立教開宣日(昭和20年8月15日)以前である事に留意されたい。

法主は大倭教立教開宣以後、現在の霊界に通じる現界からの合図の言霊は「ナム(奈母)タア(太)カア

	洗い	清穂	正面に向って静かに合掌	
奈母	ナモ	1拍	大宇宙創生の力マノハウ大神に絶対帰依の誓い	↑ 1拍 ↓
太	タ	1拍	天・陽・雄・男・相対即1体の理	↑ 2拍 ↓
加	カ	1拍	地・陰・雌・女	
天	マ	空心	上下の接語詞、加美の意	
腹	ハ	1拍	サ=ワ 万物一切生成化育の白庭 太カ、和合の盤座 系・腹	↑ 2拍 ↓
	ラ	1拍		

人間の接字  
互に心を静かに合掌に  
あなたもわたしも 互に合掌  
3拍子に心を互に合掌に礼拝  
第3、2拍子

(加) マノ(天) ハアラア(腹) である」と言われている。

なお、奈母太加天腹について「大倭流礼拝の型五拍子」として法主自らが礼拝に対する説明を記されたメモを、左に併せて掲載しておく。

⑥ アナーウレシイ 「あな」は強い感動から発する語。ああ。あら。まあ。「あな」は中世以降しだいに「あら」に取って代わられた。「ウレシイ」は嬉しい。ありがたい。はればれと喜ばしい。(福武書店『古語辞典』)

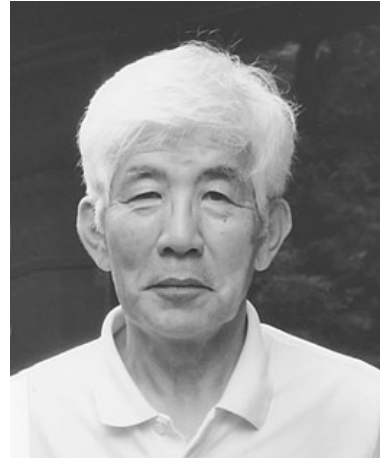
⑦ (原文の一部写真) 左上  
能や狂言の語などにおいて特定の抑揚やリズムをつける記号があるが、法主は神語りの抑揚などを再現するために、このような波形の記号を工夫されたと思われる。



# 寸 莎

第137回

青谷 善雄さん



## 継承

「未来社会はこのような形で創られるべきや、というものを空想で語るんやなく実践の中で実現しようとしている事が非常に面白かった」

1967年19歳。大学の進路に迷っていた青谷善雄さんは、後に内観療法の第一人者となったフランス国際労働キャンプ（FIWC）の先輩三木善彦さんと予備校で生徒とカウンセラーとして出会い、その薦めでハンセン病快復者の宿泊所を建設するという交流の家建設運動に参加。FIWCの集団の組み方や活動の内容に自分が求めていたものを感じ、その運動に大学の4年間を投じた。

現在もNPO法人むすびの家の理事を「夫婦でされ、2014年には『交流の家運動50年史』編集委員長として第一巻を刊行した。

善雄さんは1968年大学2年の

秋からFIWC関西委員会委員長を引き継ぎ、69年4月長島愛生園（国立ハンセン病療養所）の小田弥一さんより依頼を受け、交流の家において関西の各大学との囲碁将棋大会を開催（その後20年間継続された）。

夏には愛生園で、愛生園有志とFIWCによるむすび祭を4日4晩催し、外部からの参加者も1000人を超えた。この催しにより療養所内の人々に、ハンセン病の問題について関心を持つ人がたくさんいる事を知ってもらったし、祭りを一緒に楽しめるのは、普通の人間として当たり前の事だという共通認識ができた。

「差別の問題は、社会的な仕組みを変革するのが一番手っ取り早い解決策だという人が多いけれど、それで実際に人々の心の底から差別が無くなるのか。ハンセン病への差別や偏見の歴史は長く、皆がそれを承認してきたという事実がある。らい予

防法が廃止されたから差別が無くなるわけではない。それをどう解決していくのか」

善雄さんは昭和22（1947）年、大阪府富田林市にある美具久留御魂神社の宮司（同姓の青谷家）の隣家で誕生。兼業農家で両親が共働きだったため（体育の教員）、日露戦争に出征したという祖父の甚三郎さんと多くの時間を過ごし、農業に対する考え方や方法を教わった。

「祖父には、牛車で野菜を天王寺まで売りに行き家計を支えた事もあったと聞いた。粟ヶ池という大きな池の見える小高い丘へよく連れて行ってくれましてね、池を海と思えば向こうに金剛山、葛城山、二上山もある。何処と比較しても遜色のない良い景色や。わざわざ外へ観光に出て行くという気持ちにはならないと言ってみる生活に誇りを持っていたのは印象的だった」

生物学に関心はあったが三木さんの影響で関西学院大学では心理学を専攻。1971年卒業し大阪市に就職した。一貫して福祉職に携わった。生活保護のケースワーカーを10年。児童福祉、国民健康保険、高齢者福祉を経て最後は社会福祉協議会に出向した。この経験から、「行政のできることに限界がある」と改めて実感する。

「ハンセン病問題は解決に向って動いていると思いがちだが、差別を無くす事は簡単ではない。一人一人皆個別の事情を抱えているし、一朝一夕に解決できるものではない。いかにお互いの信頼関係をつくって、その人の中に入っていく事ができるか。療養所の人は高齢で亡くなっていくけれど、そういう課題をどう残していくのか」、善雄さんは何度となく継承という言葉を口にしていた。

1972年25歳の時、FIWCの仲間である由美さんと結婚。三木さんの実家である京都の御香宮で式をあげ、療養所からも7人の仲間が参列した。司会は徳永進さん。「妻の親戚代表が挨拶の中で、この結婚披露宴とその進め方に敬意を表すると言ってくれた事が忘れられない」

仕事の傍ら30歳で職場の仲間と草ラクビーチームを立ち上げ、ブレイヤーとして10年。資格を取得しフリーを45歳まで続けた。「勝つ事にこだわらず、ルールを重んじ、パスは必ず後ろにする。一生懸命戦うけれども試合が終ればノーサイド、全てを忘れ友達や。仕事では苦労もあったが、ラクビーの思想に触れ経験できた事は本当によかった」

今後は、「運動の記録を残し、今生き残っている人達との繋がりを大事にしたい」。（聞き手 李章根）

# あじさい日誌

6月13日 電話番号変更の工事が終わり、教務本庁・(宗)大倭大本宮・大倭出版局は0742・45・1192(シゴ イイクニ)番となりました。これは大倭紫陽花邑の最初の電話番号で、瑞光院(法宅)で使われていました。

6月15日 大倭神宮月次祭。  
6月23日 大倭大本宮月次祭。

この日お聞きしたのは昭和42年6月23日の法話で、6月の禊ぎ月らしく古代人の禊ぎの様子や生まれ変わりの話等が中心でした。本紙未掲載。

6月27日 玄徳院の高橋良美さんが故郷福島に帰られることになり、午後12時から大倭会館で送別会を開きました。各大祭にはまた来られるそうですが、教

## お知らせ

教務本庁  
(宗)大倭大本宮・大倭出版局  
電話・FAX番号は  
**0742-45-1192**  
となりました。

長さんはじめ参加者30人余りで名残りを惜しみました。その後、教務本庁で『おおやまと』編集会議。引き続き三人の会が開かれるのが恒例で、「神通力如是」の次回以降掲載分について勉強会をしました。

6月29日 静岡市の宮城島豊さんがご夫妻で来邑されました。7月6日 大倭神宮月次祭。

この日は東京都杉並区の長谷川僚さんが初めて参拝されました。『ことむけやはす』一・二巻を読まれて法主さんに興味をもたれたとか。

夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

6月16日 午後1時30分から菅原園交流ホールにて第41回大倭安宿苑卓球大会開催。参加者46名中、利用者が42名、職員が4名。シングルス男女別トーナメントは男女共に須加宮寮が優勝、コロガシシングルスは茂毛路園が優勝、コロガシダブルスは菅原園が優勝。近年稀な白熱した対戦と応援合戦や、また矢追明昌常務理事と舟橋宏祐事務局長によるエキシビジョンマッチで大いに盛り上がりました。

6月18日 定時評議員会で平成30年度の決算及び役員の変更が行われました。

(菅原園)

6月9日 映画サークルで「ハウルの動く城」を上映しました。

(須加宮寮)  
6月14日 新しい先生により気持ちも新たに書道クラブを行いました。

(長曾根寮)  
6月23日 (特養) 喫茶倶楽部あじさいに16名が参加。かたつむりと紫陽花の飾り付けで季節のおやつを味わい、歌レクを行いました。

6月29日 (デイ) 「七夕の置物飾り」を作り持ち帰りました。

(茂毛路園)  
6月18日 「ピアノでうたおう」開催。発声練習の後、「ふるさと」「ほたる」を歌い、「かたつむり」ではカスタネット・大鼓・

### 表紙写真について

和歌山県岩出市 森脇聖淳 暑中お見舞い申し上げます  
「鈴月かあさんの甥っ子です」

この写真は昨年七月に撮影されたもので、場所は和歌山市の伊太祈曾神社そばの四季の郷公園です。

和歌山に移り住んで十年近くになります。デジタル片手の徘徊の日々を過ごしています。当初は神社仏閣が主な被写体でしたがここ数年より足元の草花にも興味湧くようになりまして。鳥や昆虫など見かけますがレンズを向けると直ぐに逃げられます。今回のチョウトンボはそんな爺さんに同情して撮影に協力してくれたものです。感謝

トライアングル・マラカスを使って演奏。終わりは「一杯のコーヒーから」でした。

(八重垣園)  
6月10日 恒例となっている梅ジュース作りを行いました。

青森市 高橋末子

『おおやまと』6月号の表紙となった弘前・大仏公園のアジサイが地元新聞に載っていたので送らせていただきます  
(※7月2日付『東奥日報』同封。12日(金)に私達も見学に行き予定です。延之の治療院の名前も「あじさい治療院」です。

## あんない

\*月次祭(大倭神宮)  
8月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭教立教開宣祭  
東光大祭及び祖霊祭  
8月15日(木) 詳細は左欄。

\*大倭会主催第607回祝会  
8月4日(日) 変則的で、大倭大本宮境内の清掃神事として午前9時より。なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。  
\*月次祭(大本宮)  
8月23日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

### 大倭教立教開宣記念祭 東光大祭 祖霊祭 各ご案内

令和元年8月15日(木曜日)・旧7月15日)

#### 立教開宣記念祭

午前10時より 大倭神宮

#### 東光大祭 祖霊祭

午前11時30分より、東方の碑でご挨拶

正午から、奥津斎庭で祖霊祭

祖霊祭が終わり次第、教長さんをお迎えして、拝殿で東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の行われている間は、拝殿では法主様の東光大祭での法話などを聞いていただきます。